湯浅八郎と新島襄との比較

和田洋一

一　はじめに
二　湯浅のアメリカ移住
三　新島と湯浅とヨーロッパ
四　つぶれそうになった同志社

一　はじめに

新島襄は、一八九〇年（明治二三年）一月二三日にこの世を去り、湯浅八郎はそれから三カ月後に誕生した。八郎の父湯浅治郎は、アメリカから帰国したばかりの新島を通してキリスト教を知り、キリスト教徒となって新島に深く傾倒し、新島亡きあとの同志社を憂いて京都に移住し、無給で同志社の財政管理のために奮闘した人物である。今から八年のち、一九九〇年一月二三日には新島襄没後一〇〇年が記念され、つづいて四月二九日には湯浅八郎生誕一〇〇年が記念されることであろう。

新島襄と湯浅八郎とを比較するとき、似通っている面、共通している面が二つや三つではないことにだれもが気付いていることであろうが、列挙してみると次のようなことになると思われる。

① ふたりとも東京に生れた（新島は江戸の神田一ツ橋、湯浅は東京市赤坂区）。② ふたりとも群馬県安中とは切っても切れぬ深い関係にあった。敗戦の翌々年、安中には新島学園が設立され、晩年の湯浅は、自分のふるさとは安中であると人に語っていた。③ アメリカに長期にわたって滞在し、アメリカから絶大な恩恵をうけ、絶大な影響をうけた。④ アメリカとくらべてヨーロッパ諸国との関係がうすかったこと、特に英国との関係がうすかったことが注目される。⑤ 若いときに洗礼をうけてキリスト教徒となり、祈りの生活をつづけ、神の声を聴いて行動した。⑥ 同志社の最高責任者（社長、総長）となった。⑦ 国粋主義者、右翼、警察から、好ましからぬ人物、要注意人物、非国民、国賊と見られた時期があった。⑧ 学問の上からは自然科学系であり、人文科学系、社会科学系ではなかった。⑨ 性格的には強く激しかった。⑩ 京都にじっとおとなしくしておれず、講演、学校の用事、教会の説教などで各地を動きまわっていた。⑪ 音楽は嫌いではなかったが、讃美歌をうたうのは不得意であった。

ふたりの違う面をあげればきりはないが、新島が四七歳、比較的短命でこの世を去ったのに反し、湯浅は九一歳まで生き、死の数日前まで活動していたという違いはひときわ目だっている。

二　湯浅のアメリカ移住

アメリカなくして新島なし、という言い方は許されるかも知れないが、これは、アメリカなくして後半生の新島なし、と言い直した方が無難であろう。新島とアメリカなくして湯浅なし、そう言い切っても反対の声はあがるまいと

予想される。

同志社普通学校（のちの同志社中学）を卒業した湯浅八郎が、なぜ親もとを離れ、祖国を離れてアメリカへ移住する決心をしたのかは、湯浅の生涯について知りたいと願うものにとって最初のかなり大きな疑問である。湯浅のながい生涯、湯浅にとっての日本とアメリカについて、湯浅自身に語ってもらい、聞いている側がセミナー式に質問する、そういう企画が同志社アメリカ研究所内でたてられたのは今から七年前で、私もそのプロジェクト・チームの中に加わったのであるが、チームの一人から発せられた「なぜ？」という問いに対して湯浅は次のように答えた。

どうしてわたくしがそういうことを考えたのかわかりませんが、卒業したらアメリカに行きたいと思いました。なぜアメリカに行きたかったかと言えば、大学に行くためとか、あるいは何か職業を習うとか、お金を儲けるとかいう明確な目的を持っての渡米ではありません。何となしに、ただ神と人との前に正しい生活をしたいということが、わたくしのいちずな考えだったように思います。（同志社大学アメリカ研究所編『あるリベラリストの回想』（日本ＹＭＣＡ出版部、一九七七年刊一八ページ。）

プロジェクト・チームのメンバーの中にはなぜ親もとを離れる気になったのか、父親治郎が厳格すぎるので逃げ出したかったのだろうかと心の中で考えていた人がいたかも知れない。日本がいやになったとしたら、どういう点でいやになったのか、それを聴きたいと思った人がいたかも知れない。私は私で、湯浅は同志社的環境の中で育ったのだからアメリカを第一に選ぶのは自然であるとしても、イギリス、フランス、ドイツが第二、第三、第四の候補地としてあったはずだし、そのへんの選択の過程について聴きたいと思っていた。しかし湯浅の話を聴いているうちに判ったのは、選択などということは湯浅になかったこと。湯浅の念頭にはアメリカしかなかったということである。同志社の生徒は、創立のときいらい英語がよくできる。アメリカ人の先生がおり、英会話の時間もあるということは世間に知られていた。八郎少年も英語には自信があったらしいのであるから、移住の候補地に英国を考えてもおかしくな

いように思えるのであるが、よくよく考えてみれば、同志社のアメリカとの関係の深さと、英国との関係の薄さとは驚くばかりである。それは新島のアメリカとの関係の深さと、英国との関係の薄さに原因があることは明らかであるが、新島はどうしてあのように英国とは疎遠だったのであろうという疑問が次に湧いてくる。新島は、一八七二年（明治五年）ヨーロッパの教育事情視察の目的で、文部省の役人といっしょにアメリカからまず英国に足を踏み入れ、マンチェスター、グラスゴー、エディンバラ、ロンドンなどにふた月近く滞在し、言葉も楽に通じたであろうから、英国人とのあいだにもうすこし親しい関係ができてもよかったのではないか、そんな風にも思える。

ともかく新島の創った同志社はアメリカ一辺倒であった。「官許同志社英学校」の表札が京都の寺町通り丸太町上るの仮校舎にかかげられたのは一八七五年（明治八年）一一月であったが、英学校の英が英国を意味せず、英語を意味していたことは、当時だれの目にも明らかであったにちがいない。ただ、同志社英学校は同志社英語学校ではなく、英語を勉強しながら英語圏特にアメリカの事情について学ぶ、聖書、キリスト教のことを学ぶ、そういう学校であろうと多くの人はばく然と思っていたにちがいない。校長はアメリカで一〇年間勉強した人であり、教師はアメリカ人宣教師ということで、世間が同志社をアメリカ色の強い学校らしいと思いこむというのは当然のことであっただろう。新島校長の俸給はアメリカからきている。今出川校地に次つぎと建てられた煉瓦づくりの教室やチャペルはすべてアメリカからの寄付金によるものであったのだから、同志社英学校より同志社アメリカ学校の方がふさわしかったかも知れないのである。

同志社英学校を中退した徳富蘇峯は、年をとってから『蘇峯自伝』を書き、新島襄に対する尊敬と親愛の情を表明しながら「米国化せる同志社への不満」などという見出しをたて、同志社の教師をつとめているアメリカ人宣教師に

対する不満をぶちまけている。「何事もアメリカ、アメリカと云ひ、日本男児の真面目を忘れているよう」な学生に対する不快感をのべ、「当時の同志社は、全く米国の学校にて、祭日とて休むでなく、日本の国旗を揚ぐるでもなく」と言い放っている。

八郎少年が同志社普通学校で学んだのは、一九〇二年から八年へかけてであり、蘇峯が学んだ時期から四分の一世紀を経過しており、アメリカ色は著しく薄れ、日本の学校らしくなっていたことはまちがいない。

しかし、八郎少年は、教室の授業中、あるいはチャペルの講話の中で、新島先生の話、アメリカの話を何度も聴いたであろうし、彰栄館、チャペル、ハリス理科学館、神学館（現在クラーク館）など、京都では珍らしい煉瓦だてがすべてアメリカ人の寄付でできたことも知っていたであろう。同志社のキャンパスの近くには宣教師たちの住宅が散在しており、それらはいずれも広びろとした庭をもち、奥まったところに二階建てバルコニー付きの洋館がたっており、日本人は（その中には筆者である私もはいっていた）アメリカ人との生活水準の格差を感じさせられていたのである。英国色というものは同志社にはどこにも感じられず、ドイツ人宣教師アルブレヒトが一時教えていたということはあるが、ドイツ色フランス色など同志社にあるはずもなく、少年八郎が、いちずにアメリカ行き、アメリカ移住を考えたのも無理からぬことであった。同志社はそれほどアメリカナイズされた学校だったのである。

三　新島と湯浅とヨーロッパ

新島襄は国禁を犯し、生命がけで函館を脱出し、インド洋からアフリカの南端をまわり、大西洋を北上し、ようやくアメリカ合衆国の土を踏んだ。上陸したからといって知人がいるわけではなく、新島の語る英語はアメリカ人には

通じない、おまけにふところがさびしいというのであるから、心細さは限りがなかったと思われる。

その点、湯浅八郎は遥かに恵まれていた。父治郎はアメリカ行きを簡単に許してくれたし、太平洋をわたる船賃も出してくれた。ただ、向うへいってからの生活費は自分で勝手にかせげということで不安もないではなかった。湯浅が同志社でならった英語はシアトル上陸後さっぱり通じないので心細さを感じたということもあった。しかしカリフォルニア州には遠い親戚にあたる大久保真次郎という同志社神学校出身の牧師がいて、ともかくもたよりになった。

湯浅は当初二年あまり重労働をしてお金をためているうちに学問をしたいという気になり、カンザス州立農科大学へ出かけていった。新島襄は、ボストンに上陸したあと、しばらくしてフィリップス・アカデミーという私立高等学校に編入学させてもらい。そこを卒業してからアーモスト大学に入れてもらった。そのことは湯浅の記憶にあったはずであるが、州立農科大学の学長か主任教授に対して、自分は日本のドウシシャ・アカデミーを卒業した、と言ったところ、それであっさり入学OKということになった。卒業証書を見せるとか成績証明書が必要だとか、そういう面倒なことを何とも言わないで、さっさと入学させてくれたので、湯浅はアメリカはいい国だと思ったようである。湯浅は昆虫学の勉強をするようになり、大学院でマスター・オブ・サイエンスの学位をとり、アメリカに永住するつもりだったところ、日本人女性と見合いをし、結婚することになった。式をあげたあと、その女性（清子夫人）が日本へ帰りましょうと言ったのでびっくりし、奥さんが日本へ帰るのを当然のことと思っているようではいっしょに帰るほかはないと考える。このあたりは日本人の男性らしくないわけで、湯浅はすっかりアメリカナイズされてしまっているように思えるのであるが、京都帝国大学内に新設されることになった農学部、その昆虫学担当の教授になることが決まり、一年間ドイツとフランスへの留学を命ぜられる。アメリカの大学で勉強していたというだけでは学歴不充

分ということで湯浅に箔をつけるためにヨーロッパ留学ということになったと思われるが、この一年あまりが何らかの意味で湯浅にプラスになったのかどうかは全く判らない。湯浅は、パリに着いて日本大使館で関東大震災のこと、東京が全滅したらしいことを知らされたと随筆の中で書いているが、それ以外に湯浅がパリについて、フランスについて語ったということ、書いたということは私の知っている限り全くない。ドイツについてもだいたい同じである。湯浅は敗戦後も西ドイツへはすくなくとも一度は行っているのであるが、彼が滞在したベルリン、フランクフルトについて、あるいはドイツとドイツ人全般について語ったのを私は一度も聞いたことがない。ヨーロッパ留学中に英国へも渡ったらしいのであるが、そしてドイツやフランスとちがって、英国では言葉が自由に通じたはずであるが、湯浅が英国について語るとか書くということは一度もなかったのではあるまいか。奇妙といえば奇妙である。湯浅にとっては「新世界」ははだ合いがよく、「旧世界」ははだ合いがわるかったのであろうか。「ニュー・イングランド」がすっかり気に入ってしまったので、「イングランド」はどうもしっくりしなかったのであろうか。それにしても同じアングロサクソンのアメリカに対してあんなに親近感をもち、英国に対してあんなに疎遠だったのはどういうわけであろうか。アメリカをアングロサクソンの国というのは適当でないので取消すとして、そして英語国と言い直せば、まあまあいいのであろうが、その問題を考えていると、新島襄の英国に対する疎遠がひとりでに心に浮んでくる。

新島は、先にのべたように、一八七二年五月に大西洋をわたり、英国にふた月滞在し、そのあとフランス、スイス、ドイツ、ロシア、オランダ、デンマークなどを旅行する。その間、新島は英文でほとんど毎日、日記をつけているのであるが、感動したとか感激したという記述はなく、ただ一度、ドイツ帝国のニュルンベルク、バーンベルクを

通過してザクセン王国にはいったときに、窓の外にひろがっている農村風景を眺めて新島が目を輝やかしたらしいと思えるくだりがあるだけである。

新島は日本を脱出する前からカトリック教会に対しては偏見をいだいていたと思われ、それにフランスが戦争に負けたということもあったのであろう。パリにはわずか四日しか滞在せず、アルフュス・ハーディー宛の手紙の中でもフランス人をあなどったような冷ややかな印象を伝えている。それに反して、プロテスタント国であり戦勝国であるドイツには始めから好意もしくは敬意をいだいていたもののごとく、「梨や林檎やすももの実が気持よく実っている」、「農夫はみんな働いている。男も女も子供たちもそして犬すらも、ある仕事に打ちこんでいるかのように思える」、「非常に小さな町でも教会堂はある」などと何となく好意的である。「ザクセン王国へはいると土地は全く平らでよく耕やかされており、小麦や大麦がよくみのっており、黄金のじゅうたんが一面にしかれたようだ」とものべられている。私は八年前に「新島襄とドイツ」という論文を発表しており、それは『日本の近代化とキリスト教』(新教出版社刊)の中におさめられているので、重複は避けるが、新島は約一年間ドイツに滞在し、ドイツ語をある程度熱心に学び、ドイツ学をも心がけ、ドイツ人の友人をもち、日本へ帰ってからも手紙のやりとりをし、ドイツ人からドイツ語の手紙をもらっている。一方、「湯浅八郎とドイツ」という論文を書くだけの材料がどこかにあるのかどうか、現在の私は、なさそうだとしか言えない。

新島は、アメリカから英国へ(日記の中には great Britain という言葉は一度だけ出てくる。当時、日本国内で「大英帝国」という言葉が使われていたかどうか不明である)わたって、あちこちあるきまわったのであるから、当然英米比較論が日記の中に断片的にでも出ていいと思うのであるが、ちっとも出てこない。英国教会の礼拝に出席しても新島は、「ロ

ーマン・カトリックに似ている、似すぎている」と感じたようで、どうもなじめない、やはりニュー・イングランドの方がいいと思ったようである。新島は、グラスゴーで生徒たちの歌をきき、ボストン、ニューヘヴン、ニューヨークの生徒たちのようには上手でない、とも書きつけているが、新島は、アメリカ合衆国の中部、西部、南部を知らないこともあって、英と米とを比較するというような言葉づかいはしていない。ニュー・イングランドという言葉を原則的に使用している。新島は、ヨーロッパ各国をまわったあと、結論としてヨーロッパは無神論的になっていると感じ、嘆くのであるが、敬虔で信仰的なニュー・イングランドがやはり一番いいと感じて一年四カ月ぶりに帰米する。

新島と湯浅との諸外国に対する関係は、アメリカへの親近感、愛情、アメリカから受けたものの大きさは、どちらがより大きいとは言えず、新島の場合、アメリカというのは実は九分までニュー・イングランドであるが、湯浅の場合それほどのパーセンテージではないということ、英国をはじめ、ヨーロッパ諸国への関心はうすかったが、新島の場合、ドイツとの関係を無視することは許されないということ、新島はアジアの諸民族に対しては冷淡であったが湯浅は、韓国、台湾、ネパール、パキスタンなどに度たび足をはこんでおり、その土産話を直接聞く機会に恵まれたこともあって、視野は新島以上に広かったと断言できる。

四　つぶれそうになった同志社

湯浅八郎が京都帝国大学農学部教授の地位をすてて私立同志社の総長に就任したのは、一九三五年（昭和一〇年）二月である。総長の任期は四年であったが、湯浅は二年と一一カ月で退陣せねばならなくなった。わずか二年と一一カ月ということも言えるが、一方で、二年一一カ月、よくまあからだがもったものだ、神経組織がよくまあこわれなか

ったものだとも言える。それは悪戦苦闘の日々であり、緊張の連続であり、よろこびの訪れは稀であったと思われる。第一次同志社総長の時期の前後で、湯浅の人世観、世界観が大きく変わったとは思えないが、湯浅の人生行路が思いがけない方向に変わったことは確かである。

私は先に、新島と湯浅は共に国粋主義者、右翼、警察から好ましくない人物、要注意の人物、非国民、国賊とみられた時期があったと書いた。それは新島が自由党の主だった人びと、板垣退助、中島信行、植木枝盛らと接触し自由党のシンパサイザーと見なされ、警察官が同志社のキャンパスのあたりにうろうろしていた時期、湯浅がマルクス主義者の教授たちを支持し、国体明徴の側に立つ教授のクビを切り、勅語を誤読したなどの理由で苦境におとしいれられた時期、それら二つを念頭においてのことであった。

この二つを比較することそのことはたいして意味はないと思うのであるが、一九三五年から三七年にかけての湯浅の受難は、そのまま同志社の受難であり、日本のキリスト教主義学校全体の苦しみとも通じるものがあり、この機会に取りあげて湯浅をもう一度見直す試みをしてみたい。私はいま湯浅の受難と言ったが、湯浅がまずいやり方をしたおかげで同志社はあのときがたがたになったと思っている人もあり、湯浅自身は『あるリベラリストの回想』の中で、自分は当時の同志社の人たちの意見をほとんど聴こうとせず、ひとりで正しいと思うことをやった、と反省し、一方、一番たよりになるはずの神学科の先生がさっぱりたよりにならなかったとか（四九ページ）、その他いろいろとのべている。当時同志社大学予科の教授であった私は、一方で湯浅総長を支持し、一方で総長のやり方に不安を感じるということがあり、その後四四年、四五年の月日の流れの中で私の見解がかなり変わってきているということもある。湯浅八郎は今日すでに歴史上の人物であり、私もやがてこの世から消え去って行く人間として言いのこすべき

ことを言いのこしておきたい。

湯浅が同志社の総長に就任したということは、大学長を兼ね財団の理事長をも兼ねるということを意味していた。湯浅は就任当時四二歳で、それまでの一二年間は昆虫学の教授として農学部の学生相手に講義をしたり、研究の指導をしたりしていたのが、にわかに私立学園の最高責任者になったのであるから、始めから危っかしい面がうかがえた。湯浅は同志社の教員職員学生の意見をきき、特に大学長なのだから教授たちと相談しながら方針を出していくべきであったのにそれをしなかった。湯浅は自信をもち強力にことを進めていったので一方ではたのもしいという感じもあったが、教授たちにとって湯浅は雲の上の存在であった。湯浅は時おり雲の上からおりてきて教授会に列席したが、教授たちの意見をきこうとする姿勢はみられなかった。

そのこととは別に、湯浅にとって、また同志社大学にとっての最大の不幸は、法学部教授会がまっぷたつに割れていたということ、両方の勢力が伯仲していて、人事にかんする決定を投票によって行なおうとするとき、たまたま一人が欠席したことによって決定が左右されるというほどであった。新任の総長兼大学長を迎えるにあたっては、両派が自分の側に引きいれようとして運動したのは当然のことであったかも知れない。結果としては進歩派が湯浅を味方に引きいれた。そして湯浅総長兼学長は反対派の教授、助教授各一名のクビを切った。反対派はおとなしくしていればこの次は自分がクビを切られるかも判らないと思って、外部の右翼団体と連絡をとりながら、反湯浅、反進歩派のあらあらしい闘争を開始した。

予科教授会の進歩派ともいうべき若い三人真下信一、新村猛、和田洋一は、当時法学部の進歩派ならびに湯浅総長に精神的支持を送っていた。しかし年をとってその頃をふり返ってみれば、湯浅新総長は就任直後まず法学部教授会

がまっぷたつに割れている状態を改めるために全力を傾注すべきであったという結論に到達する。

法学部教授会の分裂は一九二九年（昭和四年）の同志社騒動のときに生じたものであり、分裂状態は湯浅を迎えるまで六年つづいたのであって、分裂し分裂状態がながくつづいたことにかんしては湯浅に何の責任もない。私は、進歩派という名称を先に使ったが、マルクス主義に傾いていた人たちと中道的な人たちとの寄り合い世帯であり、その反対派も保守的な人たちと中道的な人たちとの寄り合い世帯であった。文学部教授会は全体として法学部の進歩派にたいして顔をしかめているということがあった。「文学部神学科の教授と学生とが、授業を休んで語り合い、交りを深める〝退修の日〟に、小田実（みのる）、阿部行蔵などの学生が日本軍の満州、華北での侵略行為をきびしく非難し、それに対して教授たちは軍を支持するかのようなあいまいな発言をくり返した。時期は北京郊外蘆溝橋事件のはじまる数カ月前のことで、小田実の言があまりにも痛烈であったので、その場の印象を忘れることができない。同志社の神学生があのようなハッキリした発言をしたことを誇りに思っている。」と当時神学生であった提中孝三牧師は四四年ぶりに証言している。同志社精神、新島精神を守るべきはずの神学科の先生たちがちっともたよりにならなかったと湯浅は嘆いているが、その通りであったと私も思う。ただ神学科の教授たちが毅然たる態度をとっておれば神学科はつぶされたかも知れないし、同志社大学そのものがつぶされたかも知れない。

予科の学生は、配属将校に扇動されチャペルに篭城し、ストライキを敢行した。それは蘆溝橋事件の日、一九三七年七月七日の前々日である。予科教授会は、ストライキを指導した国防研究会の連中の背後に配属将校がいることを知っていたので、学生をどう処分するかで苦慮した。しかし教授会は分裂しなかった。右でも左でもない、といってやや保守的なクリスチャンの有力教授二、三名が、配属将校の不法を許さないという断乎たる態度を示し、左がかっ

た若い三名が無条件にこれを支持したので、右がかった三、四名の人たちもさからうことはせず、無関心派は発言せず、指導的役割を演じた学生への強硬処分を教授会は満場一致で決議した。配属将校に扇動された国防研究会員学生の処分は苛酷すぎたかも知れないという反省は今日ないではないが、教授会がわれなかったことはさいわいであった。

湯浅総長は、同志社はそこらあたりの私立学校とはちがう。新島先生によって創られた、独自の精神をもった学校である、外からの圧力があっても守っていかねばならぬ、と決意をみせたとき、若輩の私など総長といっしょに同志社を死守するつもりになり同志社がつぶれてもかまわないと思ったが、いよいよ同志社大学がつぶされた場合、二〇〇〇名の学生はどうなるのか、よその大学がはたして彼等の編入をうけいれてくれるであろうか。そんなことを思うとかわいそうで心は乱れた。

そういう状況の中で、神経衰弱におちいらず（当時はノイローゼという言葉はまだなかった）、辞表を出そうともせず頑張っている湯浅八郎の存在は、確かに驚異的であった。同志社の教職員のかなりの部分は、湯浅さんがあの調子では同志社はつぶれる、つぶされるとささやきながら心配していた。湯浅の退陣を望んでいる人の多いことは明らかであった。学外の湯浅総長排撃運動もしつこかった。右翼にはカネがあり、次つぎに反湯浅の宣伝パンフレットをばらまいて、われわれにうっとおしい思いをさせた。警察が同志社に非好意的であったことも明らかであった。大学予科の三教授、どう考えても治安維持法に違反するようなことをしていないわれわれ三名が警察によって逮捕され、そのために湯浅はついに退陣の決意をせざるをえなくなり、三七年一二月に退陣するが、そこまで頑張りつづけた湯浅の強さ、激しさは全く人間ばなれしていると思えた。「新島襄はおどろくほど強い人、激しい人であったが、湯浅さん

も負けず劣らずだ」と思わずにはいられなかった。

さいごにもうひとことつけ加えるならば、湯浅が仮に法学部教授会の分裂状態を解消しようとして全力投球をし、仮に成功したとしても、それで同志社大学が安泰で、戦争中を無事乗り切れたなどということは到底考えられない。同志社の内部が仮にまとまりを見せていたとしても、外部のとうとうたる流れ、そして日本の国全体の状況がおかしくなっているのに同志社だけがどうして独自のキリスト教主義、自由主義、国際主義を維持できよう。湯浅は抵抗する姿勢をとった。しかし相手が強すぎるのでその姿勢はなかばくずれた。それでも抵抗はつづけようとした。そしてまたくずれた。あんなものは抵抗の名に値いしない、ということもできよう。しかし私は、湯浅が、社会科学的な見透しにかけるということはあったものの、あの事態の中で同志社を守り抜こうとして抵抗の姿勢をとったことに満足する。まずい抵抗のおかげで同志社はがたがたになったことは歴史的事実であるが、巧妙な抵抗などというものが当時ありえたとは思えない。

私は始めに、新島も湯浅も讃美歌をうたうのは不得意だったと書いた。教会で讃美歌をうたうとき、新島のよこにいた八重子夫人は、新島の下手なのにあきれ、まるで歌になってないと語ったことがある。湯浅にかんしては、私はすこし離れたところで聴いていたが、湯浅は口を動かしてはいるのだが、声が出ていないと思った。湯浅は自らを音痴（おんち）と称していた。同志社ママさんコーラスの会長に湯浅が推載されたとき、湯浅は音痴の自分がコーラスの会長に推載されるとはうれしいことだと、心からよろこんだということである。

湯浅の民芸への執心、これに匹敵するものは新島には見出だせない。

付記　一九八一年一〇月三一日、群馬県安中市新島学園主催の湯浅八郎先生追悼集会に記念講演を依頼され「湯浅八郎先生九十一年の生涯」と題して語ったその内容と、この随想的論文の内容とは、多くの点で共通しているが、新島学園の場合、聴衆の大部分が、高校生だったということもあり、第一次同志社総長時代のことはくわしく語らなかった。新島と湯浅とを比較しながら湯浅の姿を浮びあがらせようとする思いつきは、新島学園から依頼をうけたことがきっかけになっており、そのことで私個人は新島学園に対し感謝している。